

□異人館10景

風見鶏の異人館

松原 新一 〈文芸評論家〉

え・石阪 春生

北野のあたり、ずいぶん変わった。いいとかわるいいとかいうのではない。だが、変わった。まだ残暑のきびしい九月の半ば頃、私は、トアロードを歩いてみた。坂道を登って、つきあたった所を、東へむかって歩いた。夕暮の闇が、町をおおい始めていた。新しいマンションが、あちこちに建ち、はなやかなホテルのあかりがまぶしい。北野天神のすぐ西隣に、風見鶏の異人館がある。そのまわいかいが、やはりホテルである。神社とホテルと異人館と。それらが、ほぼ同じ場所に、寄りそうように建っている眺めに、何とも奇妙な感慨を覚えずにはいられない。古い日本人の信心の世界と、異人さんへの憧れをはらんだ文明開化のなごりと、はなやかではあるが、どこことなくいかかわしい気配もある現代の風俗と。どうあれ、それらがいっしょくたに寄り合っているところに、私たちの現在があるのかもしれないとも思うのだ。

風見鶏の異人館は、今、中華同文学校の寮になっている。私が、その前を歩いた時は、子供たちが食堂でにぎやかに夕食をたのしんでいる声がかきこえていた。私は、異人館の中へ入ったことは一度もない。外人ではなく、異人さんによぶことのなかに、何か不思議なもの、新奇なものへのはるかな憧れの心がこもっているようだ。私にとっても、異人館は、その内部がどうなっているのか、あくまでも憧れていた未知の世界としてのこしておきたいのだ。



□異人館10景

旧ハツサム邸

赤尾 兜子 〈俳人〉

え・西村 功

相楽園に旧ハツサム邸が北野町二丁目の三本松の近くから移築されたのは、たしか昭和三十六年のこと。異人館博士、坂本勝比古氏の努力やその他もろもろのいきさつを私は知っている。新築するよりも、もっと費用がかかったとも聞いた。けれど、今になってみると、消滅するよりはよかったと思う。百歳ほどの神戸という街には、味のある建造物がすくない。

相楽園へはいままで数度足をはこんだ。そしてこの邸を二度ばかり見た。もとのところにあつた邸を見ているので、いささか孤影悄然の感があるが、若い人には、そんな感傷もなからう。

建築家、ハンセルの設計だそうで、外国へいってみると、目だたぬ建物だが、日本の自然のなかにあるから体をなしている。長崎のグラバー邸を、先年、陳舜臣氏夫妻と遊んだついでに見て回ったが、かなり大きなものだった。それとくらべると小型。だが、かえってかわい気がある。ハツサムという人は居留地（いまはない）に來たインド系英国人で、綿を神戸へ売った人らしい。

その居留地はいま心のなかで追想するしかないが、この夏、香港へ旅をしたとき、ふと居留地のことを思った。

事情もあるのだろうが、この邸は、春、秋二シーズンしか一般に見せていない。この文を書くため、私はわざわざ訪れて見られず、電話でたずねると、菊花展が相楽園で開かれるまでは、ダメですということであった。

A. W. Shimizu

□異人館10景

小林秀雄氏邸

安水 稔和 △詩人▽

え・山本 文彦

何人かの人に、異人館を見に行ったことがあるかとたずねたら、見に行ったことはないという。では、見たことはないのかとたずねたら、いや、見たことはあるといった。私がたずねられても、やはりそう答えるだろう。神戸に住んでいるおおかたの者にとって異人館はそういう存在ではなかるうか。これは異人館にかぎらぬようだ。山ぎわの異人館の門を出ると坂道。坂のしたに町が広がり、町のむこうに港が。神戸の代表的な顔のひとつ。だがやはり、人間は自分の生活とのかかわりにおいてもの、を捕える。異人館といわれ港といわれても、とまどう。とまどいながら、山も見ず海も見ず町なかをひたすら行き来する。

異人館が神戸という土地に明治という時代に数多く建てられたことには、それなりの必然性があったのだろう。そして今、そのほとんどがなくなり、また、なくなろうとしているのには、これもまたそれなりの必然があるのだろう。だから、異人館の美しさを語り、その保存を叫ぶとき、その人はきつと異人館だけではなく、それとかかわるなにかを見つめ語り叫んでいるはずだ。異人館になんを見えるかということは（あるいは、なんにも見えないということは）、そう考えてみれば、案外、私たちの現在のある部分を問うことであるのかもしれない。



□異人館10景

門兆鴻邸の扉

三枝 和子 〈作家〉

え・山崎 朔三

古びた木造の洋館には不思議な魅力がある。特に何かいわくありげにびったりと閉された扉など。夕暮のぶらぶら歩きに、ふとその中へ入ってみたい誘惑に馳られたりする。

門兆鴻邸の扉もその一つだ。狭いポーチで、赤煉瓦の扉とのあいだもほんの数歩。道を歩いていて、そのまま、すっと吸いこまれてしまっても何のことはないように思えるのが奇妙に心をそる。薄茶色の塗装がはげてくすんでいるのも、門灯が赤錆びて今にもその鉄棒がぼろぼろと崩れ落ちそうなのもかえって幻想的で、それはもう小説の世界と区別のつかない雰囲気だ。

そう言えば、かつて神戸に住んだ島尾敏雄氏も、小説のなかでこの道を歩いていた。

「……私は着物を着た摩耶を連れて生田神社の横手の道を三角市場の方にでて、山手線の電車を横切ると山際の方に引っ張って行った。……私が摩耶を山際の北野町の方に連れて行ったのは、やはり人目を避けるためであった。それと極くわずかではあったが、あるひそかな期待があったことも疑えないと思う。北野町には植民地風の木造洋館が木立の多い傾斜の町筋に建ち並んでいて、居住者も外国人が多く居留地まがいのひっそりしたひと気の少ない町だ」。

〔摩耶たちへの偏見〕

島尾氏はそれからさらに坂道を登っていくのだが、私は扉の前を凝つと動かず、此処で吸いこまれて消えてしまった男を主人公にしようなどと考えている。



□異人館10景

ハンター邸由来

小山 牧子 〈作家〉

え・松岡 寛一

ハンター邸には、文学愛好者がともすれば心を寄せてしまうドラマチックな挿話や暗いイメージはない。

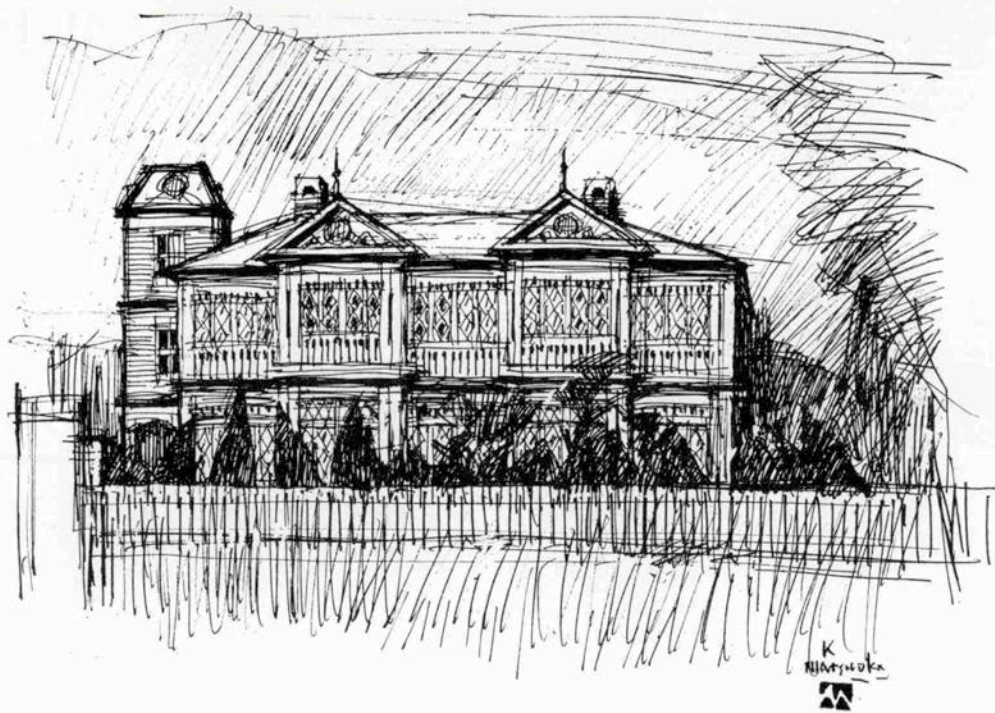
館は、英国人E・H・ハンターが明治二十年頃に建てたものであるが、この人は兵庫開港を機に横浜から移住し、現在の日立造船所の基礎を作った有能な事業家であった。

建築当時は、神戸の街とその果てに広がる紺碧の海が一望のもとに見渡せる北野町の高台にあった。が、淡いグリーンの色調に統一され、列柱式ベランダ、棟飾り、唐草模様の装飾をほどこされた底抜けに明るい雰囲気をもつこの邸宅は、霧に閉ざされた長い冬の記憶におびえる英国人ハンターの南への夢が結晶したものではなかったろうか。

近年、北野の街並の著しい変化から、取りこわされるべき運命にあった館が、文化財として王子動物園内に移されてすでに久しい。

ある秋の午後、館のまわりをうろついた私は、樹木の間を抜けてきて、館にまつわりたわむれる風の色の緑を確かに見た。そこにだけ物たちをひととき鮮明に形ずくる切れるような陽光が降り注ぎ、すぐ近くの遊園地で遊ぶ子供たちの歓声が聞えていた。

明るい、本当に明るい風貌のこの館は、いま、進取と軽快さを身上とする神戸ッ子の象徴として、長い化石の眠りにについている。



□異人館10景

移情閣周辺

春木 一夫 〈作家〉

え・松本 宏

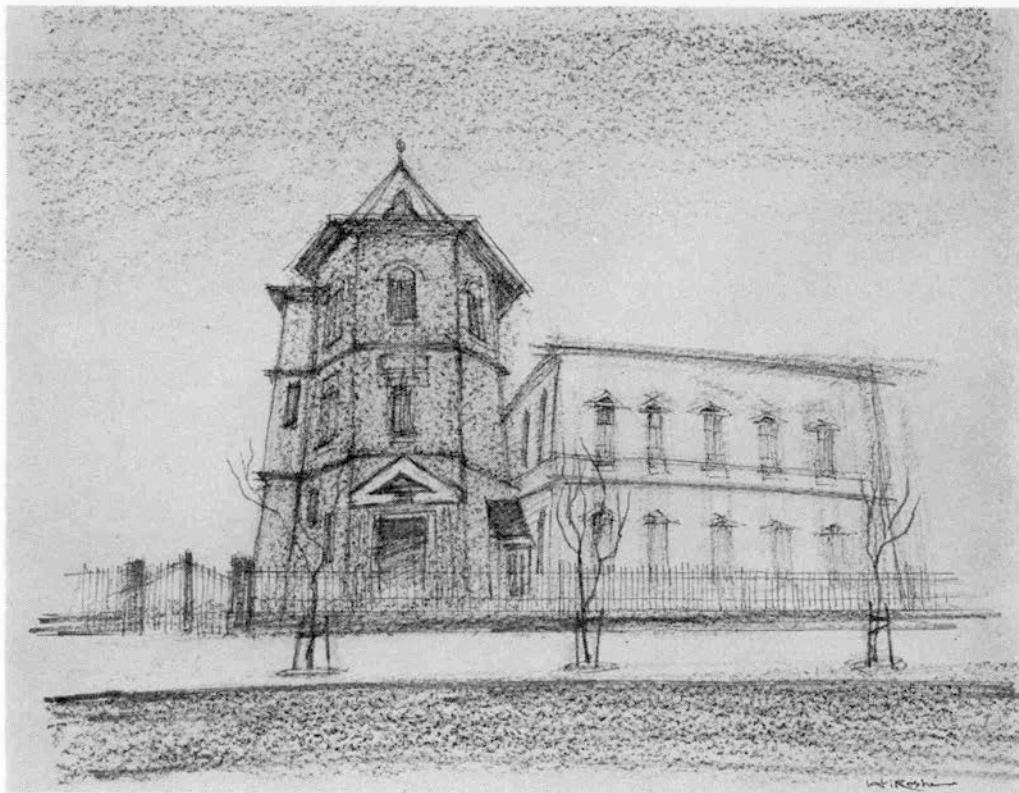
移情閣は舞子駅前浜の浜に、そそり立っている。三階建て八角堂を中心とするこの異様な建物は、他にくらべる構築物がないたため、いやでもそびえていると、いわざるをえない。

移情閣は神戸の豪商呉錦堂が、大正六年に建てた別荘である。亡命中の孫文の歓迎会が開かれたこともあり、庭内には、「天下爲公」と、孫文の筆になる記念碑もある。

この孫文が神戸に亡命中、陰になりひなたになって世話したのが、土岐益之進という兵庫警察署長だから、愉快である。土岐さんは後に神戸市助役になった大物であるが、孫文との親交は深かったようである。現在、荒尾親成さんが所蔵している遺墨の中にも、孫文から土岐さん宛の手紙があるそうだから、両者の関係は並み並みならぬものがあつたようだ。

建設者の呉錦堂さんは、これまた有名な中国人である。村松梢風の「近世名勝負物語」や獅子文六「バナナ」の主人公で、神戸に残した実績は多い。

移情閣はいつも横目にして通り過ぎるのだが、一度だけ、このそばで数時間いたことがある。昭和二十九年に天皇が植樹祭に神戸へこられた時のことだ。警察官だった私は、当然警備につくはずだったが、たった一人だけ洩れた。仕方なく、天皇御休憩の舞子ピラに近い移情閣にいたわけである。何故、一人だけ警備に洩れたか。立案者の私が自分を配置する場所を忘れていたからである。



□ 異人館10景

十五番館 (KKノザワ)

林田 重五郎 〈新聞記者〉

え・納 健

元居留地についての、わたしのたった一つの小さな自慢は、四十年前に商館などの写真を撮してまわり、ネガ三十四枚をいまま大切に持っていること。(その二、三枚は数年前に「神戸っ子」に載せてもらった)

この一帯は三十年前にアメリカ軍に空から焼かれ、ビルばかりが林立している今となつては、非常になつかしい写真である。

二階の窓から突き出たテント布地の日覆い、五拾三番などの文字を彫りこんだ石の門柱、赤レンガの倉庫には鉄の扉がついている。舗道のレンガは七十年間の人間のクツでくぼんでいるし、ヤナギの古木が人待ち顔に立っている……箱型の自動車、カンカン帽の行人。

この写真のなかで、ただ一枚だけ今もそのまま残っているのが十五番館——秋の陽の強い午後訪れて見たが、よろい戸の窓の緑色といい、とゆのネズミ色といい、四十年の時間が吹き消えた味わい。東南隅のヤナギが写真よりもずいぶん太くなったこと、あのころは頭の部分を三角形にとがらせた板べいだったのが気の利いた模様の鉄柵になっていること、クーラーが入って日覆いが見当たられないことが異なっているが、よくもこれだけ完全に保存されたものではないか。

クスノキ、イチヨウ、秋草のしげる前庭、そして15—16と刻まれた境界石もそのままだ。北野町などの住宅とは違った商館の異人館、いついつまでもいまの形で……と異人館愛惜者の一人として、しばらく佇みながら心から祈った。



□ 異人館10景

歳月が彩る幻影の館

伊勢田 史郎 〈詩人〉

え・南 和好

かれこれ二十五年くらい昔、ぼくはある小さな週刊経済新聞の記者をしていた。古い詩友であり、また酒友でもある中村隆もこの新聞社に勤めていた。北野町の上海香港銀行の社宅の裏あたりにあった社長の邸宅は古風な感じの異人館で、ぼくたちはよく招かれて、マントルピースのある客間で夜を徹して麻雀に興じたりした。北野町あたりにはこんな異人館が散在していた。街のなかにしっくり落ちついて、そこにあるべくして在った。

若い日、どういう理由でか、一の谷の山裾付近をうろろ歩いている、濃い緑のなかにたしかに人は住んでいるのだが廃屋と見紛う感じの何軒かの異人館に出あったことがある。『A……家の滅亡』とでもいった、そんなふうな幻想をほしいままにしながら、ずうっと暮れるまで、その樹々たちの暗い緑のなかをぼくは歩きつづけた。あの廃れかけていた館は、人々は、どうなっていたらだろう。

神戸南洋植物パークの西側にある旧神戸ダンロップイギリス倶楽部の建物に出あったのは何時頃のことだったろう。褪せた緑の褐色の屋根と壁。石の門の傍らの大きなブラジル産のヤシ。館の窓が少し開いていて、しばらくすると女の子でも顔を見せるのじゃないかしら、と思っただけで待っているのだが、誰も出てこない。しずかに、しずかに、この館はここにあるべくして在る。公園のなかの見世物などとしてではなく、それにあの歳月と雨風だけが彩りうる微かな滅びの匂いを漂わせながら。



歴史への眺め

福元 早夫 〈作家〉

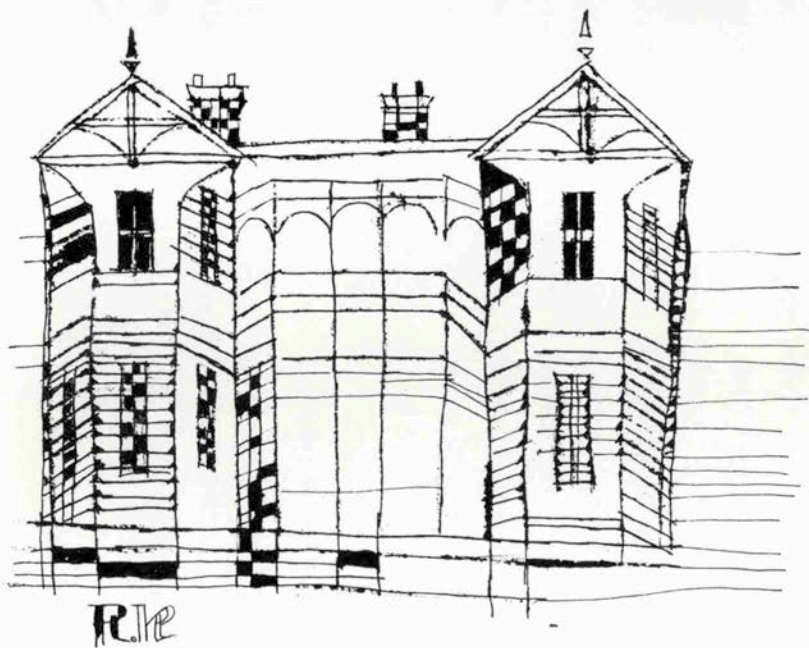
え・貝原 六一

シュエケ邸からの眺めは、眼下に街並みがひらけ、そのむこうに海がみえる。かつては、ここから、港を行き来する船や、そこで働く人々の姿を、はっきり見ることができたにちがいない。シュエケ邸からメリケン波止場への道は、一直線につながっているのだ。

邸から港にむかって歩いていった。トアロードをあるき、国鉄のガード下をくぐりぬけて、三宮神社の見えるあたりまできたとき、ふっと、この街の、あるひとつの歴史がみえてきた。慶応四年一月の、神戸事件である。

朝廷に京阪神地方の守備を命じられた備前藩士が三宮神社前にさしかかったとき、第一砲隊の隊列をフランス水兵が横切ろうとした。そこへこんどは第二第三砲兵小隊の間を横切ろうとするアメリカ水兵があらわれ、かれらは押し止めるのも聞かず、逆に藩士をどなりつけて通ってしまった。それだけならまだしも、こんどは民家のかげから隊列をめぐけてピストルでネライをつけている外人の姿がうつった。その姿に第三砲隊長滝善三郎の怒りが爆発し、滝はその外人をめぐけて槍を投げたのである。そのころの神戸には大阪をのがれた外国人たちがあふれ、軍艦も多数停泊していて治外法権地帯となっていたらしい。

結局この事件は、滝善三郎の切腹ということで落着いたが、一時は、神戸の町は外国人たちによって占領状態におかれ、危く第二の上海、香港となりかねない情勢だったというのである。



□異人館10景

僑人の家

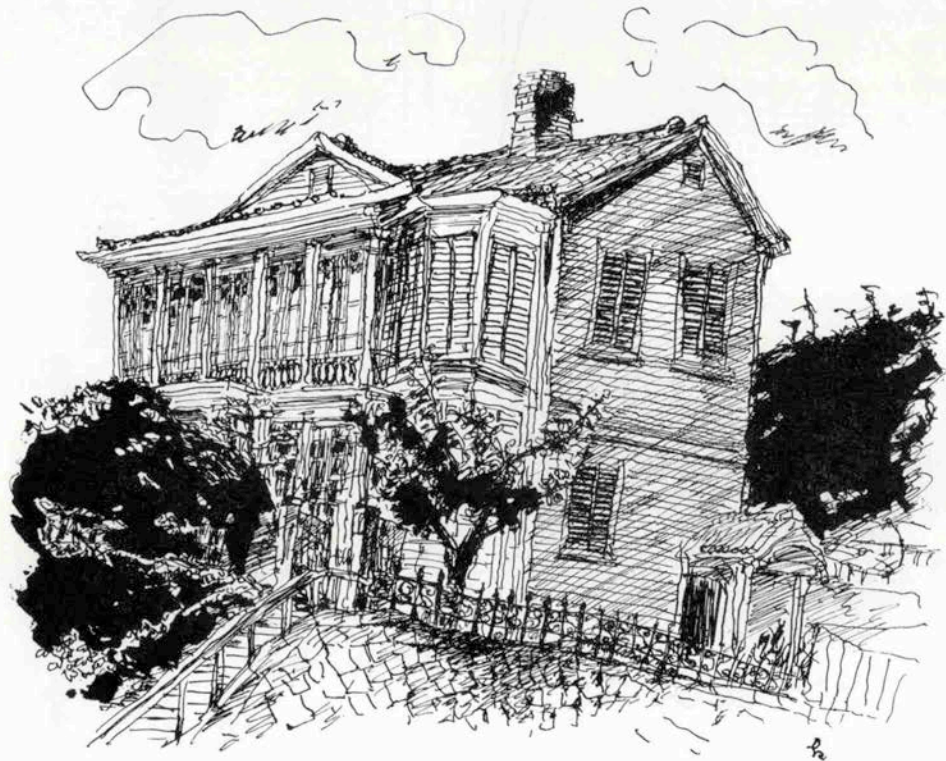
多田 智満子 〈詩人〉

え・小西 保文

北野町は山本通の山側、藁でおおわれた石崖の上に、古風な洋館が古ぼけた積木の家のように乗っかかっていて、その門に、中華民国華僑総会と、それだけ新しく鮮明な、黒地に金字の門標がかかっている。方形と八角形とを組み合わせたような二階建ての建物は、折しもどの扉も窓もみな観音開きの木の雨戸に覆われている上、色あせた緑のペンキが日焼けのあとの皮膚のように、いちめにめくれあがり、剥がれかかって、何となく人住まぬ廃屋の印象を与える。

その本館の裏手に、明らかにあとから建増したとおぼしい「事務所」があり、中国の人らしい男女二人が事務をとっていて、私が声をかけると、奥からもう一人男の人が出てきた。内部を見せて頂きたい、と頼んでみたが、館長不在で許可がえられないから見せるわけに行かない、という返事である。あまりうるうるしているとどこかの廻し者と間違えられそうな気配なので、早々に退散した。

しかしそれにしても、この建物は普通の「異人館風」であって、少しも中国的でないと感じたが、それもそのはず、あとから教えてもらったところでは、これはグゲンハイムというドイツ人の実業家が建てたもので、戦後すぐ華僑が買いつつたのだそうである。華僑の僑の字はふつうは仮住居の意だが、語源的には「寄留した客人を呼ぶ美称」であるらしいから、グゲンハイム氏もまたわが国の僑人であったにはちがいない。



チョコレートパイヨット

フレッシュなバターの入った
洋風せんべいにスイートな
ミルクチョコレートをコーティング
香ばしいおせんべいの風味と
高級チョコレートの深い味わいが
まろやかに とけあつた
ロマンチックなパイヨットです



神戸風月堂

神戸市生田区元町通 3 丁目
TEL 391-2412 321-5555

美術古剣 骨董 書画



火舎時計(江戸末期) 三八〇、〇〇〇円

鑑定 買入

刀剣研磨その他工作

一ヵ月仕上是非ご用命下さい

神戸市生田区元町通6丁目25番地

刀古骨

美

劍術董

元町美術

〒650

TEL 078-351-0081

経済ポケット ジャーナル



★兵庫県中小企業団体中央
会が20周年記念大会を開
催

九月十日午後一時二十分
から神戸文化ホールにて
兵庫県中小企業団体中央会
(嘉納正治会長)主催で
「中小企業団体兵庫県大
会」が開かれた。

これは中央会創立20周年
の記念大会で、入試練をのり



嘉納会長のあいさつで開会

越えて未来に挑戦をテー
マに大会の目的にもあるよ
うに中小企業が「総需要抑
制策により、不況と物価高
騰の挾撃を受け、かつて経
験したことのない極めて厳

しい試練」に直面してい
る。「英智と団結の力によ
り難局を打開しよう」との
決意で開かれた。

大会は嘉納会長のあいさ
つで始まり、続いて橋崎兵
庫県副知事が「組合の努力
に敬意を表し、今後の団結
と発展を祈る」とあいさつ、
その後、兵庫県知事表彰な
ど功労者の表彰、来賓祝辞
で第一部を締めくくり、第
二部では、組織、金融、税
制などの諸議案が討議され
第三部では全国中小企業団
体中央会の稲川宮雄専務理
事が「新時代を生き抜く中
小企業」とのテーマで記念
講演、第四部では懇親、パ
ンティーがもたれ六時前に閉
会した。

★経済界、ファッション都
市づくりに本腰

九月三十日、十月一日両
日、神戸商工会議所にて神
戸ファッション都市研究セ
ミナーが開かれた。これは
神戸商工会議所、神戸経
済同友会など四団体が主催
するもので、経済界の立場

からファッション都市づく
りに取り組む最初の試みで
あり、神戸の文化的風土の
中から将来のダイナミック
な都市像を求め、活力ある
産業の発展を真剣に考える
立場から経営者のために開
催されたものである。

三十日は石田順一(株サン
ミック社長「明日のファッ
ション都市像」、菅原正博
関西学院大学助教授「ファ
ッション文化産業論」、一
日は会田雄次(京都大学教授
「ヨーロッパの文化的蓄積
について」、吉田光邦(京都
大学人文科学研究所助教授
「ファッションの文化性に
ついて」の各講演が行われ
た。

神戸商工会議所では七月
に「神戸ファッション都市
問題研究会」(嘉納正治委
員長)を充足させており、
経済界の今後の動向を大い
に注目したいものだ。

★経営者セミナーに取り組
む「調研」

九月三日から五日まで京
都の都ホテルで(調研(本
社・東灘区、後藤博雅社長)
主催の「人間を考える経営
者セミナー」が開かれた。

これは、社会の変化を正
しく洞察し調みある最適の
経営のあり方などを研究す
るため設立された「調研」
の第二回セミナーで、第一
回は昨年秋、六甲山ホテル
で「新しい小売業の確立を
目指して」とのテーマで講
師を招いて行われた。

今回のセミナーには百二
十名が参加、松下幸之助松
下電産相談役のメッセージ
を問題提起として、渡波田
春夫(早大教授)、梅原猛(京
市立芸術大学長)、永田豊州
宗鏡寺住職、篠田雄次郎(上
智大学社会経済研究所教授
らの講演と、参加者による
討議が行われた。

★KOBEOフィスレディ★



唐津 信子さん(灘区)
国際試業株式会社総務部

「ハイ、国際試業です」暖かさに彼女の元気な
声が聞こえる(オフィスが隣同士ののだ)。受付
け、交換などの仕事に追われている。どういふこと
はいっばい。今度は彫金に挑戦するそうで胸をもち
きめかせている。社内では料理研究会に所属、も
っぱら食べ方を研究しているらしい。今年2歳の
彼女は目下花むこ募集中。(市立神戸商業卒業)